

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話－花鳥風月及び星・虹を愛でながら」から

主宰論説 3

花鳥風月と星・虹

最近、改めて、花鳥風月と星・虹を愛でる感受性を持ち続ける感性の大切さを感慨深く考える。松尾芭蕉翁が、「ついに無能・無才にて、この道一筋に通ずる」という思いとともに、風雅の世界に生き、「正風俳句」の創成と振興とに生涯を捧げたというのは、分野は違っても、人の生き方として、相通じるものもあるように考えられる。人生は、直線的な平坦コースばかりでなく、でこぼこで、ぬかるみ、泥んこに見舞われ、生きているのも嫌気がするコースであることも多い。それでも、花鳥風月を愛で、生きている回りの環境、季節の移り代わり、あるいは、遠い宇宙に思いを巡らすのも悪くはない。人としての気持ちの余裕を失わないで、天命を全うする術を考えるのも、大切かもしれない。

令和元年 11月 5日

俳句：ムスカリの青い花も野辺の中

夏の風物

8月の盛夏の季節となった。今年も猛暑に近い日々が続いている。昔から夏の風物と言われるものは、いろいろある。まずは、夏の暑さを忘れ、涼風を楽しむ風鈴である。風鈴は、南部鉄でできていたと思われる。軒先に取り付けられて、風に応じて、風流な音を楽しませてくれたことが、懐かしく思い出される。最近では、空調設備が普及したせいとか、とんと一般の住宅の軒先を飾ることがなくなったのは、少し寂しい気がする。機能性の追求ばかりでなく、自然と融合した風流としての日本伝統の夏の風物として、もう一回復活を願いたいものである。そういえば、松尾芭蕉が、「静かさや岩にしみいる蟬の声」と謳ったように、蟬の鳴き声も夏の風物である。しかし、この乙戸南の住宅界隈では、それほど蟬の声が聞こえない。10年間滞在した北九州の教員宿舎では、裏山があったせいか、うるさいほど蟬の声が聞こえたのに。乙戸南公園まで行けば、少しは聞こえるようだ。通常、蟬の声も、最初は、アブラゼミ、次いでニイニイゼミ、夏の終わりはツクツクボウシというように、移り変わりがある。北九州では、ヒグラシやクマゼミの声もあったようだ。今日、アブラゼミの死骸を家の玄関先で見つけた。話によると、アブラゼミは、9年近く地中で過ごし、夏の一週間の短い時間を精一杯鳴き暮らして生涯を終えるそうである。たかが蟬と言うなかれ、精一杯生きたことを称えたい気がする。もう一つの夏の風物はトンボである。昔は、オニヤンマ、ギンヤンマが住宅地の界隈を往来し、川縁や池の端では、シオカラトンボもよく見かけた。ここではほとんど見かけなくなってしまった。蜻蛉もほとんどみかけない。まして、夏を彩る蛍の光など望むべくもない。九州では、遠賀川の支流で蛍が乱舞する場所もあったように記憶している。生物の生息のための基盤が失われたせいだと思われるが、少し寂しい気もする。その反面少し驚きをもって見ることもある。サルスベリの木は、近くの民家などで栽植されているのをよく見かけるが、約1ヶ月以上夏から秋の初めまでずっと薄い紅色の花が咲き続けるようだ。そのために百日紅という異名がある。夏の多くの生物のはかなさと比較すると、驚くほど長命のようだ。生物の寿命は、どのように決まっているのだろうかと考える次第である。

平成12年8月15日

短歌：限りある命の限り生き抜いてあなかしこ土に帰るは大往生かな

